１分科会「一人一人に生きる力を育む生徒指導」

研究テーマ「プロアクティブな生徒指導体制づくり」

発表者　湖西市立湖西中学校　茂木　典子

Ⅰ　研究テーマ

「プロアクティブな生徒指導体制づくり」

Ⅱ　テーマ設定の理由

昨今の日本における、ICT の高度化や価値観の多様化による急激な社会の変化は、学校教育にも多くの影響を及ぼしている。生徒指導上の課題の多様化、深刻化もその一つである。

湖西市では、不登校児童生徒数も、いじめ認知件数も年々増加している実態がある。不登校の理由は複合的であり、一つには絞りにくい場合が多いが、「無気力」や「不安」の割合が多く、友人との関係に課題を抱え、登校できない生徒も一定数いる。いじめの認知件数増加は、各校でいじめの定義に対する理解が浸透してきており、軽微な案件もいじめとして認知していることも要因として考えられるが、「ひやかしやからかい」、「悪口」など言葉によるいじめが最も多く、次いで「軽い暴力」が主な要因となっている。また、「SNS 上での誹謗中傷」も増加傾向にあり、SNS という教員の目の届かない所で起きる生徒の人間関係のめまぐるしい変化は正確に把握しにくいという点に課題がある。

このように年々増加傾向にある不登校やいじめへの対応、さらに多様化、深刻化する生徒指導上の問題に対し、従来と同じ指導では対応が難しいことから令和４年に改訂された生徒指導提要（令和４年１２月）の中で、第１層の「発達支持的生徒指導」と、第２層の「課題未然防止教育」が重視され、全ての子供たちにとって学校が安心して楽しく通える魅力ある環境づくりや、生徒指導上の問題の未然防止への積極的な取り組みをすることが学校教育に、より一層求められるようになった。そこで本校では、生徒の主体的な活動を教員が積極的に支え、生徒がより安心して、楽しい学校生活を送ることができる体制を整えていくこととした。生徒指導上の問題を未然に防ぐ為に、先行的で常態的である「プロアクティブ」な視点から生徒指導体制を見直し、生徒を主体とした活動を推進していくことが有効であろうと考え、実践に取り組んだ。

Ⅲ　研究仮説

生徒指導体制を見直し、生徒の主体的な活動を教員が発達支持的に支えることにより、生徒がより安心して楽しい学校生活を送ることができ、生徒指導上の問題を未然に防ぐことにつながるであろう。

Ⅳ　実践まとめ

１　生徒指導体制づくりの実践　～「チーム湖中」を意識したプロジェクト会議～

（１）　実践の概要

生徒指導提要で記されている「教員の同僚性」、「学年・校内分掌を横断する生徒指導体制」などのキーワードからも、生徒指導体制づくりを見直していくには、全教員間での連携や協働がこれまで以上に不可欠であると考えた。そこで、まずは各分掌で主任を務めているミドルリーダーによる横のつながりを深めるべく、教務主任と相談して、定期的な「プロジェクト会議」を設定し、以下のようなメンバーと流れで実施した。

①参加者

教務主任、生徒指導主事、進路指導主事（キャリア教育担当）、研修主任、特別活動主任

②開催時期と内容

第１回　５月下旬：生徒の実態把握、各分掌からの伝達事項（県主催研究協議会の内容を含む）
第２回　６月上旬：体育大会と文化発表会に向けての協議
第３回 10 月上旬：前期の振り返り、後期重点目標の確認
第４回　２月上旬：生徒の実態把握、来年度に求めるべき生徒の姿

第１回プロジェクト会議において、各主任から以下の内容が提言された。

・どの学年・学級にも、良好な人間関係を築く力が弱い生徒がおり、集団の中に入れない生徒が増加しつつある。不登校やいじめ問題に発展する前に、全ての生徒にとって、学校が安心して前向きな気持ちで生活できる環境にしたい。［生徒指導主事］
・学校評価アンケートで、「自分にはよいところがあると思う」と回答した生徒は 70%である。昨年度、高校入試の面接検査で最もよく聞かれた質問内容は、「志願理由」と「自分自身の長所やいいところ」についてであった。自分の良さに対し、自信をもてる生徒を育てたい。［進路指導主事］
・主体的に学習に取り組む生徒を育成するために、生徒が自他を見つめ、よりよい生き方を考えながら、学ぶ意欲を向上させることができる授業づくりを目指したい。［研修主任］
・行事に対する満足感や達成感を強く感じている生徒が多く、行事が学校生活の大きな支えになっている。その一方で、気力や他者への思いやりに欠ける部分も見られる。［特別活動主任］

そこで、各分掌主任たちの提言をもとに実態を改善していくためには、自己肯定感を高めることが必須であるとの共通認識にいたった。教育活動全体を通して、自他ともに認める共感的な人間関係づくりに取り組むことで、良好な人との関わり方を身に付けさせ、生徒一人一人の自己肯定感の向上を目指す。それによって、学習意欲、人間関係形成能力、キャリアプランニング能力などに加え、いじめや不登校などの生徒指導上の問題も未然に防止できることを目指して、「校内分掌を横断する」実践に取り組んだ。

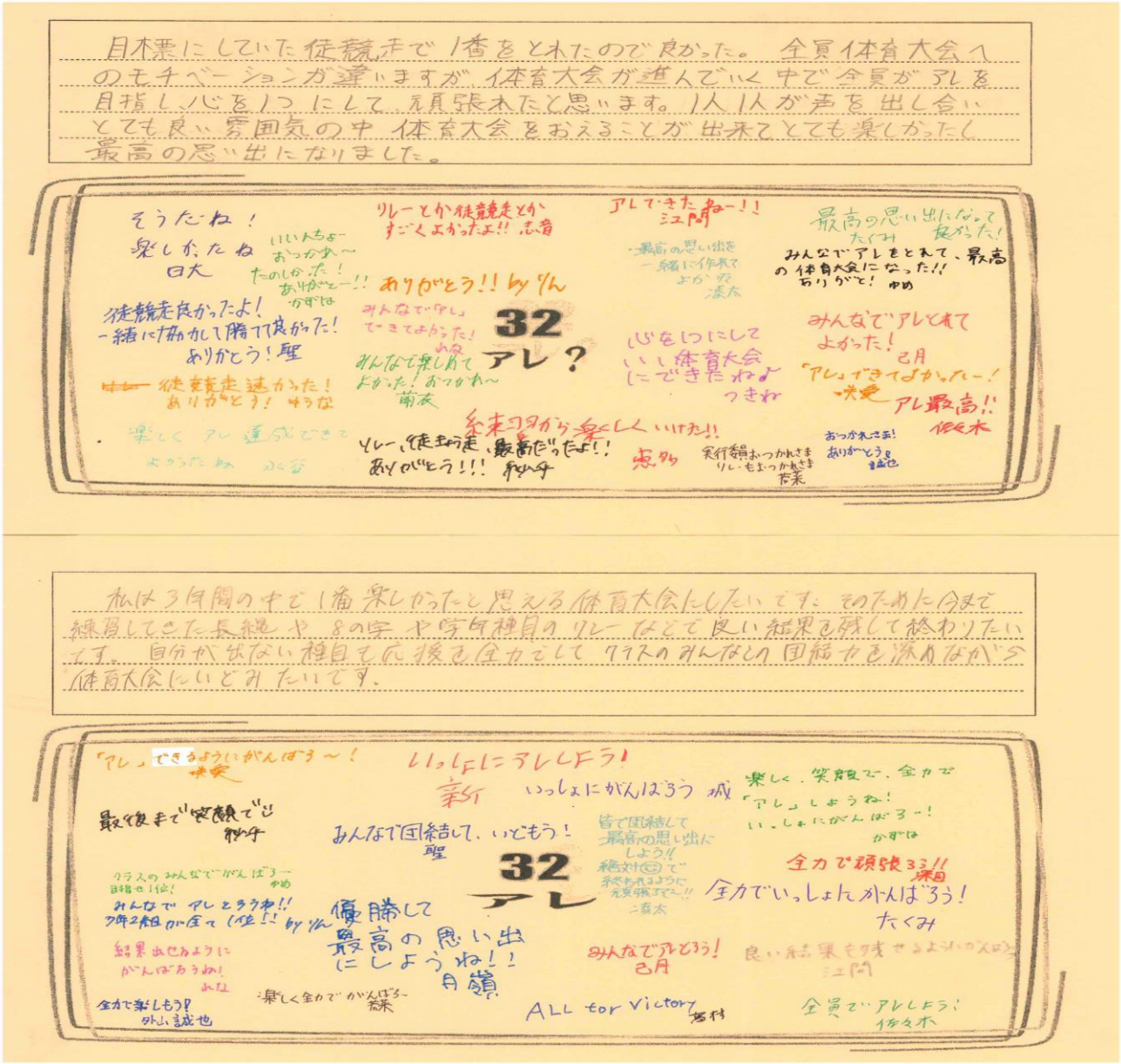
【プロジェクト会議での提言を基にした、「校内分掌を横断する」実践例】

＜特別活動主任との連携・協働＞

特別活動主任との計画・立案の際には、生徒指導の目的を意識し、学校行事に向けて、互いの個人目標を発表し合う活動や、応援メッセージを書いたり、励まし合ったりできる活動を設けた。

また、互いの努力を認めたり、称賛し合ったりできる機会を行事後にも設けることとした。生徒は仲間のコメントを読んだとき、「このクラスにはあなたが必要です」、「あなたには本当に素敵なところがあります」、そんなメッセージを感じ取ることができるようにすることがねらいである。

実際に活動してみると、記入スペースいっぱいになるほどのコメントを求めて、多くの仲間に積極的に話しかける生徒や、内気な仲間に対して自らコメントを書こうかと声をかける生徒も増え、クラスの一員として互いを認め合おうという意識が高まる様子が見て取れた。



振り返りのワークシートに書き込まれた級友からのメッセージ。

欄が埋め尽くされるほど、お互いの頑張りを認め、褒め称え合う言葉が並んでいた。

＜研修主任との連携・協働＞

生徒指導提要で記されている「自己存在感の感受を促進する授業」、「共感的な人間関係を育成する授業」、「自己決定の場を提供する授業」を意識し、生徒指導主事が全職員に授業を公開した。英語科の授業において、級友同士の交流を通して、自らのよさや個性について考え、ずっと大切にしていきたい「自分らしさ」を表現させることとし、研修主任と協力して指導案を作成した。

また、これを基にし、保健体育科の創作ダンスの授業では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点を取り入れ、教員皆が生徒指導と教科指導の枠を超えていく意識を高めていった。授業では、タブレットを使用して通常の速さ・ゆっくり・さらにゆっくりの３段階の速さで、理解度と動きの難易度のバランスをとりながら授業を進めていった。また、できる生徒がミニティーチャーとなり、動きのアドバイスをしたり、一緒に動きの確認をしたりすることで多くの生徒が、どの授業でも、「できた」、「わかった」と思える瞬間を設定することができた。このような実践を繰り返し行うことで、学校生活で大きな割合を占める「授業」に対する不安を和らげる効果も期待できる。

保健体育科の創作ダンスの授業で、できる生徒がミニティーチャーとなり、動きのアドバイスをしたり、一緒に動きの確認をしたりすることでどの授業でも、多くの生徒が「できた」「分かった」と感じることができた。

２　生徒の主体的な活動を教員が発達支持的に支える実践

（１）　実践の概要

生徒にとって、学校が安心して楽しく通える魅力ある場となるように、活躍できる機会は重要である。

そこで、学校行事や生徒会活動など、生徒が役割を分担し、それぞれの個性をよりよく生かして活躍できる取り組みに生徒指導の視点を多く盛り込み、生徒相互の共感的な人間関係を形成し、自己肯定感の高まりにつなげる取り組みを積極的に行っていくこととした。実践内容は次の２点である。

①生徒主体の体育大会運営を支える実践

②明るい声が響き合う挨拶運動を支える実践

（２）　取り組み内容

①　生徒主体の体育大会運営を支える実践

学校行事の準備・運営に実行委員会が積極的に関わり、学校行事を充実させるだけでなく、学校全体を活性化し、生徒に多様な資質・能力を育むことをねらいとして実践を行った。「自分は必要とされている」「自分は役に立っている」と感じることができる自己有用感を育むことは、いじめや不登校の未然防止だけでなく、生徒が安心して生活できる居場所づくりにもつながると考える。

実践の中では、競技内容やルールづくりに関しては生徒のアイデアや方向性を尊重し、準備、活動、反省に至るまで、意見を求められない限り、教員はサポート役に徹することとした。ただし、行事の目的、安全性、特別な配慮を要する生徒への支援という３点に関しては、教師側が基本的な案を示した。

ア．実行委員会の活動の流れ

本校の体育大会はコロナ禍が明け、久しぶりの１日開催となった。活動は大きく分かれて準備・活動・反省の３つの過程で行われる。準備は３か月前から行われ、主に昼休みや放課後の時間を利用し活動する。実行委員会の活動は３か月の間に２５回行われた。全校生徒にアンケートを取って要望を聞き、「生徒全員が活躍できる体育大会」を実行委員会のスローガンとし、一人一人が輝ける場を作ろうと話し合いを重ねた。

この際にも、教員はサポート役に徹し、実行委員長と方向性を話し合ったり、円滑に実行委員会が運営されているかの確認を行ったりした。また、各学年主任、担任には進捗具合の連絡を行い、体育大会に向けてどのような話し合いが行われているかを教員間でも共有できるようにし、教員からの意見や要望を集めることもできるようにした。

イ．実行委員活動内容

第１回	6/6(火)	顔合わせ、実行委員長の決定
第２～４回	6/7(水)～9(金)	種目について(プログラム検討)
第５回	6/21(水)	学級運営委員とスローガンについて話し合い
第６回	6/22(木)	話し合った内容を共有
第７回	6/23(金)	プログラム検討(最終案)
第８回	6/27(木)	スローガン募集アンケート作成
第９回	7/6(木)	スローガン決定
第１０回	8/31(木)	２学期の活動計画の確認
第１１回	9/4(月)	体育大会練習について
第１２回	9/6(水)	掲示作成
第１３回	9/7(木)	昼の放送について
第１４回	9/8(金)	体育大会当日の仕事確認
第１５回	9/11(月)	体育大会総練習の役割確認
第１６～１７回	9/12(火)～13(水)	掲示作成
第１８～２２回	9/14(木)～15(金) 9/19(火)～21(木)	総練習運営リハーサル
第２３回	9/22(金)	最終確認・準備
第２４回	9/27(水)	本番
第２５回	10/2(月)	来年度へ向けて振り返り

アンケートを行い、全校生徒から多くの意見を取り入れようと意欲をもって取り組む様子。

自分たちで作り上げた体育大会に大きな満足感を感じている実行委員の生徒たち。

ウ．プログラム検討について

最近では、午前開催の“時短”運動会や体育大会が増えてきていることから、本校でも体育大会の時間やプログラムについて検討を重ねた。実行委員会では主に、体育大会の目的・目標、目標に照らして適切な手段であるかの２点について検討した。

目的１

生徒主体で、体育大会の計画・準備・運営などを進めることによって、生徒の実践力をつけるとともに、やり遂げた達成感を味わえるようにする。

目的２

学級対抗で競技や応援を行うことにより、生徒の学級への所属感を高め、学級の和を深める。

目的３

体育の学習成果を意欲的かつ積極的に発表し、運動に親しむ習慣を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図る。

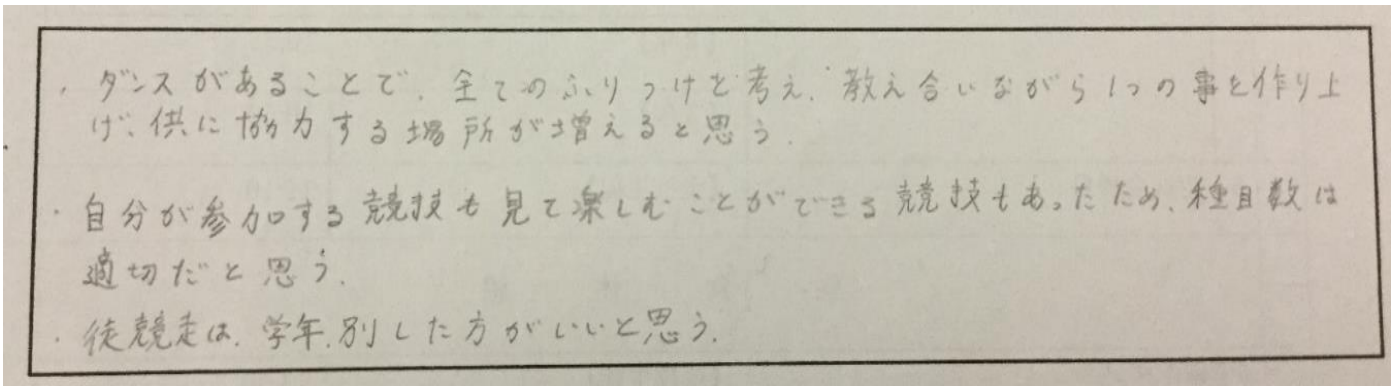
<令和５年度 体育大会プログラム>

競技種目		参加生徒
1	男女徒競走	【１・２・３年男女】
2	サイコロ徒競走	【１・２・３年男女】
3	綱引き	【全校生徒】
4	学年僥倖	【全校生徒】
5	生徒会種目	【全校生徒】
6	創作ダンス	【全校生徒】
7	長縄跳び	【全校生徒】
8	女子 学級対抗リレー	【１・２・３年女子】
9	男子 学級対抗リレー	【１・２・３年男子】

プログラム検討については、「みんなが輝ける場」にしようと話し合いが深まった。走ることが苦手な生徒も意欲的に取り組めるようにと「サイコロ徒競走」を考案し、サイコロの目をふって出た数が奇数か偶数かによって走る方向が変わるというもので、ドキドキ感や運試し要素も加わり、楽しんで走ることができ、好評だった。また、これまで通り「徒競走」も行い、走力に自信がある生徒は徒競走で出場できるようにと選択制にした。また、綱引きは学級の和を深めるだけでなく、異学年とも交流できるように縦割り対抗戦も実施した。創作ダンスは、各学級のダンス実行委員を中心とし、学級オリジナルの創作ダンスを振付から考え発表した。

その他にも実行委員がこだわったものとして「放送」と「入場の仕方」による演出がある。最後の見せ場である学級対抗リレーにおいて、走る選手が全員一斉に入場する方法から、一人一人選手の名前を読み上げ、学級ごとに入場する方法に変えた。放送原稿もすべて実行委員で作成し、「みんなが輝ける場」を作ろうとこだわりぬいた演出は生徒のみならず、教職員にも大変好評だった。

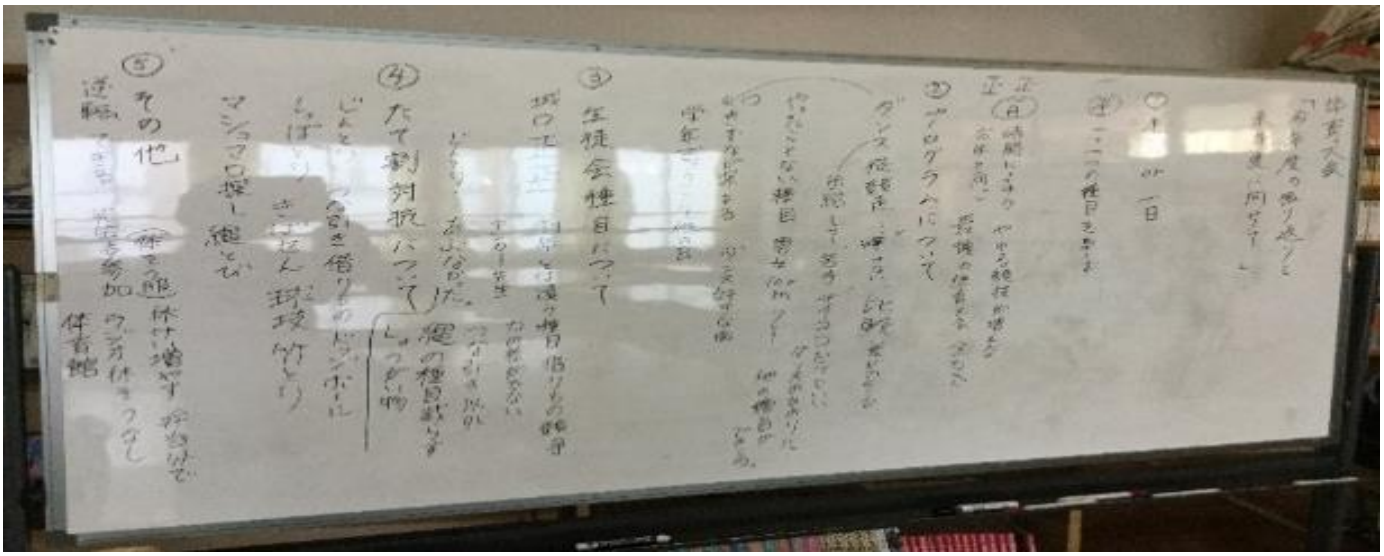
プログラム検討会議では、「みんなが輝ける場」を作ろうと、多くの案が出され、検討が繰り返された。全校のみんなのためにという明確な目標があったため、主体的に考える生徒が多く見られた。



・ダンスがあることで、全てのふりつけを考え、教え合いながら1つの事を作り上げ、供に協力する場所が増えると思う。

・自分が参加する競技も見て楽しむことができる競技もあったため、種目数は適切だと思う。

・徒競走は、学年別した方がいいと思う。



振り返りを、個人と各学級で行い、多くの意見が出された。自分たちで成功させた行事だからこそ、「来年度はもっとこうしたい」と生徒一人一人が主体的になって意見を出し合った。

② 明るい声が響き合う挨拶運動を支える実践

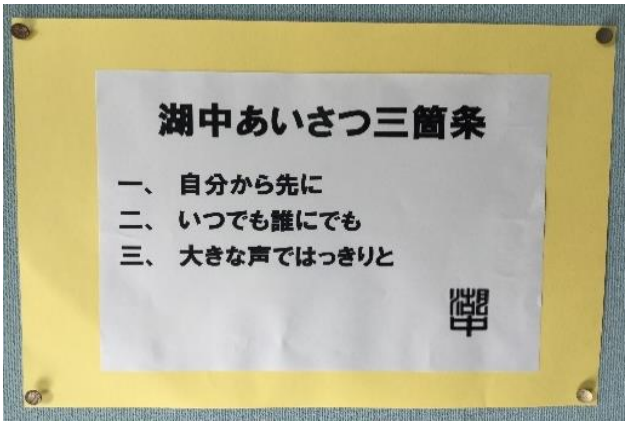
挨拶を大切にすることで、基本的な生活習慣はもちろん、よりよく生きるために必要な力を身に付けることができる。本校で実施した令和５年度生徒アンケートの結果から、「挨拶を進んでしている」と回答した生徒は全体で 44.4％と低く、学年別では１年生(42.3%) ２年生(41.5%) ３年生(50.0%)という結果だった。また、教職員の挨拶に対する評価も「自分から挨拶できない生徒が多い」や「挨拶の声が小さい」など評価は低かった。

このような実態に対し、生活委員長の「挨拶を自分たちの学校の自慢にしたい」という願いをもとに挨拶運動を提案したため、次のような助言を行い、活動の機会や場を設定した。

・挨拶に対して楽しいイメージをもてるように「全校生徒がワクワクするような種をまこう」を挨拶運動のテーマとしてはどうか。
・挨拶をする際の心得について考えを深められるように、話し合いの機会を設定した。
・ワクワクする挨拶運動の実現に向け、可能な限り具体的な手立てを考えられるように話し合いの場を設定した。
・生徒自身の力でやり切れたことを生徒同士が価値付けし、次回につながるよう振り返りの機会を設定した。

その際、挨拶運動をやり切れるように企画から準備、後片付けまできめ細かい動きや配慮を考えるとよいことを助言した。

話し合いの中で、生徒は挨拶三箇条を考案し、昇降口に掲示を行ったり、昼の放送で全校生徒に紹介をしたりした。また、生活委員の生徒は登校時間に集まり、時季に合わせてサンタクロースやトナカイの格好をして活動することとなった。生徒が考案した挨拶三箇条を達成できた生徒はシールをもらうことができ、表に貼っていくという仕組みを作った。シールをもらえたことを称え合ったり、チェック表を見ながら各学年の挨拶の良い点・改善点の分析をしたりなど、挨拶活性化について生徒自らがより深く考えるきっかけとなった。



生徒が考案した、「あいさつ三箇条」の掲示物。

登校時間に集まり、時季に合わせてサンタクロースやトナカイの格好をして活動する様子。

（1）挨拶運動をやってみてどんなことを感じましたか。

みんなが、積極的に挨拶できるようになっていると感じた。また、自分自身も、挨拶が少し苦手だったけれど、大きな声で言えるようになっていた。
スローガンの「気持ちを新たに改善」が意識できた。

（3）今回の挨拶運動はどんな成果があったと思いますか。

朝から、大きな声で気持ちの良い挨拶をすることの大切さを知ってもらうことができたと思う。

挨拶運動後に振り返りをした際の様子と、生徒の感想。

あいさつ三箇条を達成できた生徒はシールをもらうことができ、表に貼っていくという仕組みを作った。
シールをもらえたことを称え合ったり、チェック表を見ながら各学年の挨拶の良い点・改善点の分析をしたりなど、挨拶活性化について生徒自らがより深く考えるきっかけとなった。

V　実践における成果と課題

［成果］

分掌主任たちが複数の専門的な視点で、同一の教育活動を見つめ直すことで、教育活動の目的や価値を再確認する機会になったとともに、自己肯定感がある生徒は自分の存在価値を肯定的にとらえることができることが分かった。

生徒アンケート結果から、「自分にはよいところがあると思う」と回答した生徒が昨年度の 70%から、今年度は 84%まで増加した。また、「体育大会や文化発表会などの学校行事は充実したものであった」という質問に「とてもあてはまる」と回答した生徒も、昨年度の 66%から、今年度は 74%まで増加

したことから、生徒主体の体育大会の運営や挨拶運動などの自他ともに認める共感的な人間関係づくりに取り組むことは、良好な人との関わり方を身に付け生徒の自己肯定感を高めることにつながり、安心して楽しい学校生活を送れている生徒の姿に近づいた。

［課題］

自己肯定感の向上が、いじめや不登校などの生徒指導上の問題の未然防止にどの程度影響を与えているかははかれない。また、継続的不登校である生徒がもつ不安や、情緒障害や学習障害に起因する無気力に対して、どのような対策や取組ができるのか、個に応じた支援を検討し続ける必要性を感じた。

［まとめ］

教育活動を通じて、生徒も教職員も、取組の継続と更なる連携によって成果とやりがいを感じることができれば、さらなる意見やアイデアが生まれ、「生徒指導体制づくり」がよりいっそう、学校全体に浸透していくと考える。

また、課題未然防止教育については、現在、生徒会が中心となり校則見直しについて自発的、自治的な取組を進めている。校則について生徒たちが議論する機会を定期的に設けることで、自分たちが考えたルールに不都合がないか検証し、さらには改善していくサイクルができる。今後、校則見直しを進める中で生徒には、自分たちの意見が反映されたと感じる自己効力感や、自分たちのルールは自分たちで守るという当事者意識の２つの力を育むことができると考える。